

第十一回

地蔵盆（地蔵祭り）と明神様

『清兵衛日記』には盆送りが終わって間もなく、地蔵盆の文字がみえる。毎年必ず記されている年中行事である。しかし年によって扱いに差があるので、この行事を追ってみる事にした。地蔵盆は地蔵祭りとも記されている。京都を中心に近畿各地で行われる地蔵尊を供養する行事である。地蔵尊は仏教が渡来した奈良時代にはすでにあつたという。地蔵尊は道祖神と境神とが習合したと考えられている。厚く信仰されるようになるのは平安末期からという。鎌倉時代から江戸時代にかけては、人々のあらゆる危難を引き受けてくれる身代わり地蔵の信仰が普及し、とげぬき地蔵など身近な願いをかなえてくれる地蔵尊が町内の辻や入口に安置された。供物や地蔵尊の前に菓子や果物も供えられた。

地蔵盆

地蔵盆は七月二十三、二十四日に行われている。当時旧暦なので、現在の一カ月ほど遅れで、安政五（一八五八）年に

「地蔵盆ニ候得共 高砂町へ御盛物上ケ不申候」

とあり、地蔵盆であることは認識しているが、御供物は上げていない。供物を上げない理由は記されていないが、おろそかにしたのだろう。同年八月に入ってから「悪敷病が江戸・大阪辺に流行している」と記している。その病は「腹痛が起こり、三時（六時間）で死んでしまう」。

医者もこの病を治す薬がわからず、人々も危ないと思い、心ならずも町中まじないをしている。それは夜門口に南天の葉を置きその上にぬかを置き家内中線香をたき家の中へ煙を入れる」と。「どこの家でも行なっていてこれを役人が見回りに来て大いに叱られた。しかしこの悪病江戸では三日ケ間に四千人ばかり死んだ」との事。「八月の末には騒ぎ益々大きくなっている」と記している。その後、まじないまがいの薬が出回ったりもしている。

「御所では、九月朔日祈禱した火を町中へ配った。この火でお灸をすえるといい」という。悪病が何かもわからず、混乱しているようである。同月五日には

「一此頃ハ流行病ニテ 肴喰ひ候得者当ルなどと申 生魚一切喰不致候（後略）」

「この頃は流行病で魚を食べれば当たるなどと言って、生魚を一切食べないという人がいるので、料理屋や魚市場が休業になっている。そのため、安い時の鯉が二百文位なのに今は七八十文位に下落している」という。また「はんぺいやかまぼこまで食べない」と。或いは「精進のものでも消化の悪いものも食べないと聞いた」と記している。

身代わり御地蔵と明神様

地蔵尊に期待したのは厄除けや身代わりを担ってくれると信じているからであるが、さらに明神様にも助けを求めている。安政六（一八五九）年、悪病が京都にも広まっていくのが読み取れる。手立てのない新しい病気に神頼み一筋であったようだ。

同年七月十五日の記述に

「一流行悪病益大流行ニテ誠ニ誠ニ心持悪敷（中略）死人沢山ニテ大キニ大キニ困り入候 医
舎大ツカヘニテ呼ニ参り候テも一向参り不申 昨年トハ違ひ大悪病ニテ直ニ死ス人沢山ニ
有、尤昨年方沢山ニ病人有り 早々悪病神退散奉祈禱候 奈良 大坂 四国筋ハ大はやり
（後略）」

「悪病大流行で本当に困ったものだ。死者も沢山出て困り果てている。医者が混んでいて往診
をお願いに行っても混んでいて一向に来てくれない。大悪病で直ぐに死んでしまう人が沢山出
ている。昨年とは違い死者が多い。もつとも昨年より発病人も多いが。早々に悪病神退散の御
祈禱をした。奈良、大坂 四国筋でも大流行」と記している。同月十六日に

「一悪病神送り 町々方色々姿拵 鐘太鼓ニテ送り出し申候 誠ニ賑わ敷候」

前日御祈禱を済ませて「町々さまざまな神様に姿をこしらえ、鐘太鼓で送り出した。大変賑
やかなことであつた」と記している。同月十七日

「一今日方七日間町内会所ニ於テ明神様悪病除ケ御祈禱仕候 大西相模守殿日々被参候」

「今日より七日間、町内の会所に祈禱できるように調え明神様を迎えて、悪病退治の御祈禱を
することになった。神主の大西相模守は御祈禱に毎日お出で下さっている」という。七日間の
御祈禱のなか日の二十日、明神様に清兵衛は御膳を奉献している。

「一町内明神様ニテ悪病退散之御祈禱御中日ニ付 私方方御膳奉献仕候

御酒 洗米

赤飯

膾皿 朝瓜

花かつを

鯛 壺枚

焼物 塩かます」

七日間という長い御祈祷なので中間で御膳をお供えする気遣いをしたのだろう。赤飯と二菜それに乾物のするめである。この年は高砂町のお地藏様にもお菓子を奉獻している。

「一地藏盆ニ付高砂町へあんぽんたん奉獻仕候」

あんぽんたんというお菓子はらくがんの一種で、南京豆の殻のような形で軽く口の中で、すぐに溶ける、かさはあるが中味がないことから名付けられたという。

また他地域の明神様の応援もあった。丹後の方から「大川大明神の御札壺枚と御守護御札壺枚」で早速会所の祭壇に供えたと記している。またこの日は七日御祈祷満願の日であった。

「一町内於明神様七日間悪病除ケ御祈祷 大西相模守殿御頼申上候処 今日七日之御満座ニ付御祈後酒飯出ス

菓子椀

酒肴

三ツ鉢

いた

ゆりね

御飯

鱧焼物

はじかみ

梅肉あへ

初肴 鯉

はも

あめ焼

大平皿

同子

水物

有め」

小芋

七日間の御祈祷を神主の大西氏をねぎらっている。

御祈祷後の接待はご飯、酒、酒肴五菜、梨のデザート付で十分な接待をしたことが推測される。旬の素材の魚、野菜が使われている。代金は記されていないがランクの高い料理といえる。大西氏が帰られた後、残り物を三、四人で暑気払いをしたとある。会所の祭壇に上げられた供物は町内全家庭に配分された。同月二十四日は地蔵祭りの最後の日であるが、

「一当年流行病有之候故 町々地蔵祭りりつぱニ御座候 町ニより作り物又ハ甘酒 豆茶拵さし 何方之町も御叮嚀ニお勤被成候」

「今年は流行病があるため、町々の地蔵祭りは立派だった。町により飾り付け、又は甘酒、豆茶などを用意してどこの町でもていねいにお勤めをはたしている」と記している。

流行病はトンコロ病、或いはトンコロリと病氣名を記しているが、あつという間に亡くなるので名づけたと思われる。当時は病氣の原因も、どのように伝染するかもわからずまだ神頼みだった。この悪病はコレラであるが当時の人々にはとても恐れられていた。同月二十六日には「追々減りつつある」と状況が良い方向に向かっていると記している。しかしまだ少しだに病氣は発生していた。「町々の人は豆提灯を沢山出して祇園旅所へ持って行くことが流行して押し合いになっている。また見物人も大勢集まっている」ともある。

その後の慶応元（一八六五）年七月二十三日にもお供物を用意している。

「一高砂町地蔵様へ御盛物 あんぽん丹上ル 代五十文」

次の二十四日にも

「一壬生お地蔵様へ御膳上ル」

御膳をお供えするという丁寧な扱いをしているが、御膳の献立は記していない。同日に

「文之助 万五郎 そま みさ 朝 日限 お地蔵様へ参詣ス」

清兵衛の子ども文之助と万五郎を女中のそま、みさに付き添いをさせてお地蔵様に参詣させている。地蔵祭りの終わり日なので朝から出かけさせた。信仰心の厚いことは相変わらずである。使用人にもお参りをする機会を与えたことかもしれない。彼女達は仕事から解放された気分になっているであろうか。

【参考文献】

- ・田中宣一・他『年中行事事典』三省堂 平成十四年
- ・丹野顕『暮らしに生きる日本のしきたり』講談社 平成十五年
- 『日本国語大辞典』小学館 昭和四十七年